

1992-93年度国際ロータリーのテーマ



まことの幸福は人助けから



## Real Happiness is Helping Others

- 国際ロータリー会長 クリフ・ダクターマン ●第2560地区ガバナー 栗山 清
- 会長——内山辰策 ●副会長——上木六治
- 幹事——榎本 勝 ●副幹事——五十嵐総一
- SAA——渋谷正一 ●副SAA——松谷昊吉 ●例会日——毎週水曜日 12:30～
- 例会場——三条市旭町2-5-10 三条信用金庫本店 TEL 34-3311
- 事務局——三条市旭町2-5-10 三条信用金庫本店 TEL 35-3477  
FAX 32-7095

**出席者会員数** 会員 76名中 40名

**三クラブ合同例会ホストクラブ会長挨拶** 三条南ロータリークラブ 会長 佐藤英一

ご挨拶の前に、お礼を申し上げます。10月30日の私共南クラブの25周年記念コンサートで、三条クラブ、三条北クラブのご後援を賜り、チケットの販売にも、多くの皆様のご協力でお陰様で、楽しいコンサートとなりました。この席をお借りして、心より御礼申し上げます。

本日は、あいにくの冷たい雨にも拘わらず、150名近くのご出席であります。

昨年、初めて、三クラブ合同例会が、三条クラブのホストで行われました。今年は当番で、私共南クラブがお世話役をさせていただきます。よろしく願いいたします。

また、本日の卓話を、南クラブの初代会長でいらっしゃいます金子六郎さんに、お願いいたしました。お楽しみに、お聞き下さい。

日本で最初のロータリークラブであります東京クラブが出来ましたが、大正9年であります。その8年後の昭和3年に、米山梅吉ガバナーのもとで、日本で初めて、地区大会が京都で開催されました。



その地区大会で、京都の土岐市長さんが、歓迎の挨拶を述べられました。その挨拶に、「春の海 ひねもすのたり のたりかな」という蕪村の有名な句をもじって、「ひねもす ロータリー ロータリー」と洒落てご挨拶をされ、満場の喝采を浴びたということになります。

今宵は、私共も、京都の地区大会にあやかって、「春の海」とはまいりませんが、春の如く暖かい友情にあふれた、この会場で、「ひねもす ロータリー ロータリー」と楽しく、和やかに、ご歓談いただければ、幸いです。

本日は、ご参会ありがとうございました。

## 卓 話

三条南ロータリークラブ 金子六郎会員

### 金子二等兵の見た北方領土

#### ◎気 象

##### 1. 冬の海 怒濤の中の輸送船

昭和十九年までに敗色の色濃い二月のはじめ、新潟県中心に大きな動員令が下った。

新発田と仙台に集結し、準備を整え北海道に渡り、両部隊は前後して小樽市に集り、全市に民宿した。私は教育召集後二度目の召集で、陸軍二等兵としてこれに加わっていた。我々を北方の守りとして千島列島に配属するためであった。

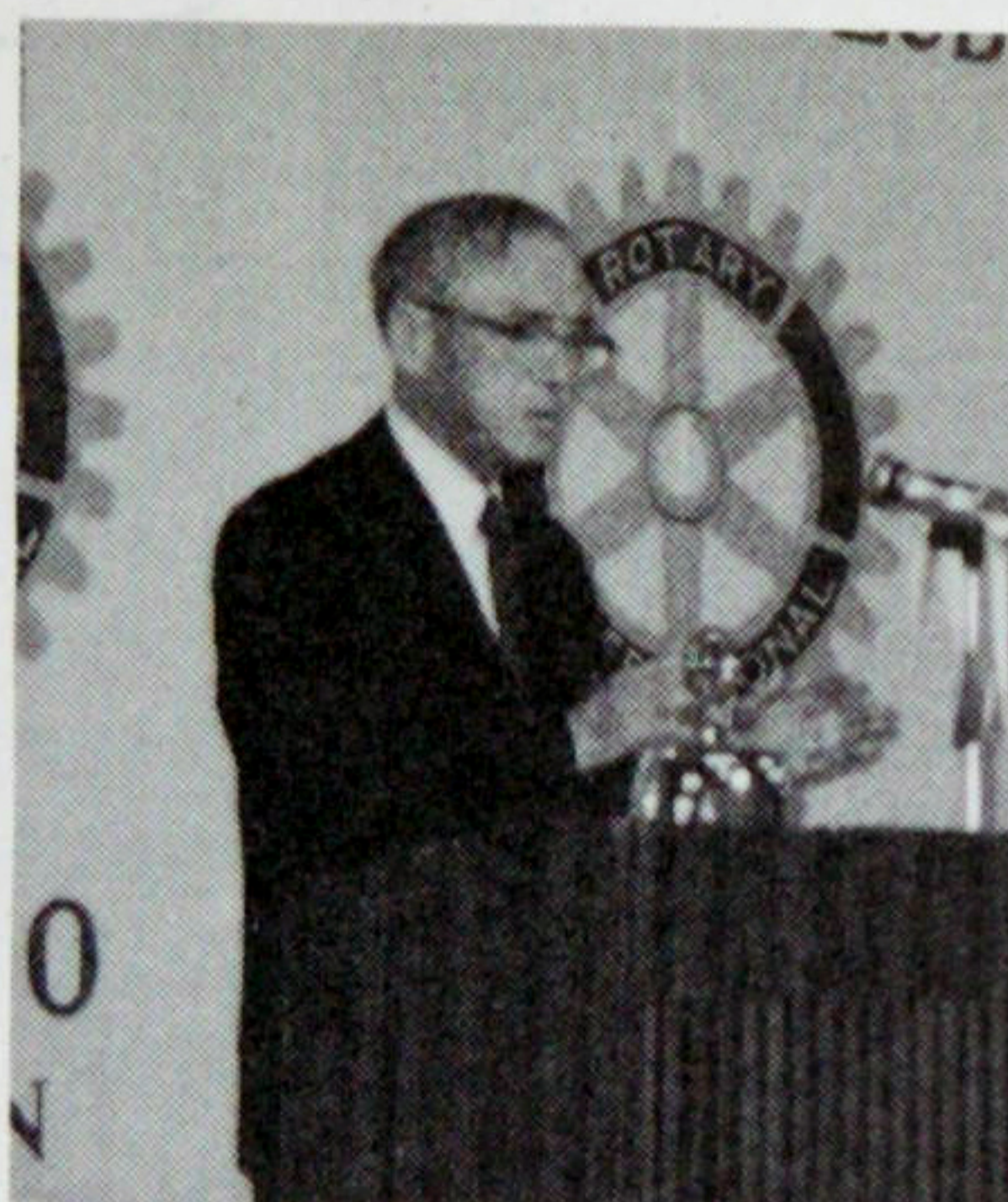
既に日本海軍は制海権を失っており、海上輸送に米国の潜水艦の潜望鏡を逃れるため大暴風の怒濤を待っていた。待つこと半月大嵐が来た。仙台部隊は第一船団、我々新発田部隊は第二船団、小樽港を出港した。波頭に乗った一万トン級の輸送船の船底の半分がみえスクリューが空転する。我々の船は枯葉のように波に玩弄された。

すぎること数日、仙台の第一船団は潜水艦の魚雷を受けて今沈没の報が暗い船倉にうずくまる我々の耳に入った。冬の北海の海は落ちれば一分間も生きられないという。全く生きた心持ちはしない。右に逃げ左に逃げ何とか潜水艦の攻撃を逃れて、択捉島の浅瀬に逃げ上った。

仙台に集結した三条の知人の多くが亡くなられた。神明町医師外山直市先生のご長男も軍医将校として参加されたが、その時に北海の海に水没、戦死された。

##### 2. 吹雪 ルチャル原の吹雪

猛吹雪のつづく毎日択捉島の海岸に我々の部隊は天幕を張り、そこに生活し沖の船からの荷物の陸揚の作業がつづいた。小型陸揚舟と陸に渡した板から荷物もろとも海に落ちてもしぐ陸に這い上れば海水は服に浸み込むまいに氷の珠になってしまうそん



な寒さであった。我々兵隊が生活する天幕舎は休むことなく吹き荒れる吹雪で全く雪の中に埋もれた。数日後に金子二等兵にも不寝番の当番がまわってきた。雪の中に埋もれた中隊の数個の天幕を巡回するのが任務だった。

自分の入っていた天幕を出て銃を片手で頭の上に差し揚げ、いま一方の手で身長以上に積った雪をラッセルして進む。追い風で猛吹雪はうしろから吹きつける。なんとか各天幕舎を巡回し戻ろうと後ろを振りかえると今ラッセルして来た跡は吹雪で完全になくなっていた。前方から吹く向かい風で方向を見失い、感をたよりに雪をこぎ分けてすすむ。帰る自分の天幕舎を見失い寒さを吹きつける吹雪の中で立ったまま途方にくれた。その時、「不寝番、不寝番」と呼ぶ声が右の方向にきこえた。その声に勇気づけられ声のした方向に雪を分けてすすむ。さがす天幕舎はない。耳をうたがい反転して左の方向にすすみはじめたら、又不寝番と呼ぶ声が右の方向に聞こえた。よろこび勇気をふるってその声の聞こえた方にすすむ。天の助け、めざす天幕舎があった。

命びろいした。母が千葉県成田の不動様に月まいりし、お百度をふんで頂いたお守り様が割れていた。

私はいまでも毎年成田のお不動様におまいりを続けている。

##### 3. 択捉島の短い春夏 台上の歩哨

択捉島の桜前線がくるのは七月中旬。吹雪の島にもおそい春と夏がいっしょに来る。この島も北海道北辺の利尻島礼文島と同じ北緯四五度くらいと思う七月の礼文島は花の浮島。択捉島でも高山植物が一斉にさき百花咲き乱れる。

太平洋を望む台上で歩哨の任務につく。足もとは一面に花いっぱい。頭の上の空で鷲が輪を描いて舞い、目の前の海上を浮き沈みして逃げる鯨を追いかけて鯨の大群が海面に跳び上る。長い長い海岸線の砂浜に無数のトドがねむそうにころがっている。長いコンブが幾筋もどこまでもどこまでも延びている。

嵐の海、吹雪の択捉も夢のような季節だ。短い、短い、春夏の期間だ。

#### ◎産 物 世界の三大漁業地

「にしんきたかと鷗にきけば私しゃ発つ鳥波に聞け」。ソーラン節の一句だ。鯨の大群が来ると雄魚のだす白子で大海原の海面が広く一面に白く濁ると聞いている。千島の海は世界の三大漁業地だと教えられている。千島の海は魚類、蟹、ウニ、コンブ、海獣、海産物の宝庫だ。季節になると択捉島の川にも鮭が産卵のために上って来る。重なりあって上って来る鮭の間に棒をたてると、しばらくの間鮭の群にはさまれてその棒は倒れない。

私が勤務した炊事場の側の沼にもそこから流れる川に鮭の大群が上って来る。冬になると北海道に帰る孵化場の漁師達が沼に網を引き、引上げた大変の数の鮭が逃げないように頭の急所を棒で叩いてゆくと、後につづく漁師が卵だけ入物に採って引上げ



てゆく。累々たる鮭にすかさず飛んで来たどう猛な色丹鳥の群がたちまちきれいにた  
いらげてしまう。海岸では我々のスキーのストックでいくらでも大きな蟹がとれる。

部隊長の命令で、主食の米は将来に備えて食いのぼし、貯蔵せよその代食は鮭又は  
蟹にせよ。一匹ものの鮭を竹竿にさして火で焼いて食う。蟹飯は一度食うと鼻につく。  
いっぺんで食欲はなくなる。鮭や蟹は金を払って切身を味わってこそうまい。千島の  
魚や海産物は日本の宝だ。

## ◎ソ連に騙し取られた北方領土

### 1. スーラダモイ東京

昭和二十年八月十五日終戦をむかえた。八月の末ソ連の兵隊が少数で恐る恐る上陸  
して来た。そして我々に、君達はスコラ東京ダモイ、すぐ日本に帰す。君達が帰る日  
本の本土は永い戦争で全く疲弊のどん底で、着る物食物は全くない。君達の兵器はソ  
連に引渡し、その他食糧や衣類は全て日本に持ち帰り本土の親兄弟を助けてやって欲  
しい。急ぎ全員で君達が山の奥深くに匿し貯蔵しているものを、君達が帰る船にすぐ  
積み込まれるよう山奥から持出して集積して欲しい。我々は一変に彼等に対する敵愾  
心はからりと晴れ、ソ連の温かい情に感激した。

択捉島に上陸以来毎日夜を日について、兵隊一人日当り米俵一俵外にカンパンの箱  
程度一個を責任量として川を渡り崖をよじ登り死ぬおもいで苦痛に耐えて山奥に集積  
した兵器食糧被服を、本土に帰れる嬉しさに、その重労働をものともせず海岸に集め  
てその作業を完了した。

いよいよ我々に本土帰国の乗船命令がきた。彼等は又我々に貴方の帰りを待ってい  
る故郷の父母兄弟姉妹に貴方が持てるだけの被服そして甘味品を持ち帰って喜ばせて  
やって下さいと。我々は生きて故郷に帰れる嬉しさ、喉から手の出る程ほしい、キャ  
ラメル、練ミルクを持てるだけ持ち、欲も手伝い身につけられるだけの被服を身につ  
けて、船に乗れば明日にでも会える肉親に思いをはせて、歩きに歩いて、てんねい港  
(連合艦隊がハワイ攻撃に向かう時の全艦隊の集結港)に着いた。我々を乗せる大き  
な船が待っていた。沸き上がる感激を胸いっぱい、大勢の兵隊が港の広場に並ぶ。

突然ソ連当局より命令が来た。

ソ連としては限られた船で一時も早く一人でも多くの兵隊を日本に帰したい。限ら  
れた船倉に兵隊一人でも多くの荷物を持ち込めば三人乗れるところ一人か一人半しか入  
れない。ソ連は君達を一刻も早く一人でも多く君達を日本に帰国させたいと思う。ソ  
連の意向を理解してほしい。それで兵隊一人当り雑糞に入る程度の日用品外に外套  
(夏物か又は冬物)だけ持ち込んでよろしいと。

急な変更の不審に思ったが、一人でも多く帰りたいという実状を理解し、折角汗を  
流して持って来た品物を後髪をひかれる思いで、広場の一か所に持参した品を山と積

んで、用意された輸送船に何の不審もいれず乗船した。明日でも会える肉親の顔、  
なつかしい故郷の山川に思いを走せて皆が広い甲板を自由に歩きまわった。

一夜明けて船は北海道の稚内港でなく樺太の大泊港に着いた。連絡事項を受領に将  
校全員が下船した。約一時間くらいで将校は又乗船して来た。不思議に下船前まで軍  
人の誇りとして許していた軍刀は再度乗船して来た将校の腰にはなかった。又我々に  
命令が下った。通達事項があるので急ぎ全員甲板より船倉に集合と。

我々全員は急ぎ船倉に下りた。とたん、甲板のハッチは堅く閉ざされ、ハッチの入  
口に機関銃がすえつけられた。

万事休す、やられたと肝をひやした。それからいままで自由に使用を許された便所  
はソ連兵の監視の中で一人ずつ許可された。

昨日も今日も船の進行方向にいつまでも陸地が見えていた。だまされた。船は間宮  
海峡を北に北にと進んでいた。スコラ東京ダモイ。すぐ日本に帰す、にだまされて、  
無念にも我々は全くの無抵抗でシベリア送りになった。

ソ連は我々をだまして北方領土を手に入れた。

### 2. 拭いきれないソ連への不信感 シベリアの捕虜収容所列島

捕虜生活も明けて二年目の春、毎日零下二十度くらいの日が続く。我々が上陸した  
北の端のソウガワニノ港から遠くに北樺太の雪を頂く白い山の峰が見える。

或る朝港に通じる鉄道に永い貨物列車がついた。何百人のソ連人が破れた靴、寒そ  
うな衣類を身につけ、軍用犬がついて肩から軽機関銃をさげたソ連兵に監視されて貨  
車から下りて来た。

密告によって捕えられた同じソ連人、一党独裁の国、共産党批判した者が政治犯と  
して、ソ連の国内にもおられないで、この港から、さらに北の小さな島に送られると  
聞いた。終生帰ることの出来ない人、大切な命がその島でつきる人達、ソ連の小説家  
ソリデニチェン氏の小説「収容所列島」はこれを書いたものだ。平気でウソをつき、  
人をだまし、密告で大衆をしぼる。ソ連は恐ろしい国だ。

終生私の胸からソ連の不信は消えない。北方領土をだまして取ったソ連、択捉島が  
日本に戻った時、少しはソ連への私のわだかまりは薄れるかもしれない。



三クラブ合同例会スナップ 於VIP



11月18日例会    ローター財団月間 卓話 日戸平太会員

11月25日例会    クラブアッセンブリー

12月 2 日例会    クラブアッセンブリー